

おのみやりくまげやりさやつき つけたり くろくまげさや  
大身槍熊毛槍鞘付 附 黒熊毛鞘



大身槍は、津山藩主松平家が参勤交代行列に使用したものであり、「大熊御槍」と称された新藩津山藩を識別する独特の目印となった。文化14年（1817）の新藩主初入国の様子を描いた「拾萬石御加増後初入国御供立之図」（津山郷土博物館蔵）中にもみえる。槍と鞘の製作年代は、文化～弘化年間であり、江戸時代後期における津山藩関係資料として貴重である。

やなぎだにこふんしゅつどいぶつ  
柳谷古墳出土遺物



柳谷古墳は、幅約0.8m、推定長3.3mの横穴式石室をもつ径7mの円墳である。昭和62年の発掘調査により、須恵器、土師器、鉄鏃、銀環、須恵器大甕等が出土した。ことに閉塞部付近から出土した鉄製の銀象嵌頭椎大刀把頭・銀象嵌鞘尾金具は、全面に銀象嵌を施したもので、頭椎大刀把頭には、花卉や亀甲型に配された2重同心円文が、鞘尾金具には「U」字文及び「I」字棒状文が施されており、この類例は全国的にも十数例しかなく、貴重な考古資料である。

ひかみてんのうやまこふん ひかみうねやまこふんぐん  
日上天王山古墳・日上畝山古墳群



吉井川と加茂川の合流地点東側には、比高20mほどの扁平な丘陵が続いている。この日上畝山丘陵南東端頂部に、前方後円墳日上天王山古墳が前方部を北に向け存在する。平成6年3月から5月にかけて、後円部頂と東側墳端部の調査が行われた。調査結果に基づく古墳規模は、墳長56.9m、後円部径32.4m、前方部長25.6m、後円部高6.35m、前方部高3mである。前方部は、低くバチ形に開き、古式前方後円墳の様相を呈する。墳斜面に葺石が葺かれ、後円部は3段、前方部は2段に段をつけ築成されているが埴輪は用いられていない。日上畝山古墳群は、直径10m前後の円墳・方墳56基が現存し、竪穴式石槨や粘土槨が確認されており、いずれも横穴式石室導入以前の古墳で、大半が5世紀後半から6世紀前半に集中して築造された、県内でも希少な古式群集墳である。

みょうほうじほんどう  
妙法寺本堂



妙法寺本堂は、桁行5間、梁間6間、向拝1間付きで、屋根は入母屋造本瓦葺である。建築年代は板御本尊墨書および鬼瓦銘により承応2年（1653）頃である。建物平面は大きく前後に分けて正面奥行2間を三方吹放しの礼堂、その奥を内陣とし、境には高敷居を入れる。内陣後ろ寄りに四天柱を立て、唐様須弥壇を置く。また、内陣礼堂境の欄間彫刻をはじめとする建築彫刻も質が高く、江戸時代前期における大型日蓮宗寺院の典型を示す重要な建造物である。

とうめいふじわらなおたね かおろ てんぽうはちねんいちようらいふくひ  
刀銘藤原直胤（花押）天保八年一陽来復日

掲載 刀（男竜丸）は、天保8年に直胤が、備中国千屋で大々的に製鉄業を営み、当時、中国地方一の大資産家といわれた太田辰五郎政恭を訪ね、豊富な原料の中から吟味した最高の鉄を使って作刀したものである。この作品（男竜丸）は、鎌倉期の備前刀をねらったもので、備前伝に優れた直胤の作品の中にあっても特に傑出した作品であり、我が国の新々刀を代表する傑作である。

あんこくじ ほんしやう  
安国寺の梵鐘



安国寺は、元禄年間に編纂された「作陽誌」によれば、もと英田郡角南（現、美作市角南）にあった善福寺が元禄年間に小田中村に移転し、改名した寺院である。この梵鐘は、竜頭は双竜式で彫りも深く相貌に迫力がある。鐘身上部の乳の間に小さく古風な葺形の乳を配列し、池の間四区に銘文を陰刻している。撞座は八葉素蓮弁である。全体の铸上がりはよい。銘文によると、永和三年（一三七七）に久米南条郡長岡（現、津山市金屋）の铸物師百濟源次によって、「作州高倉県」（現、津山市下高倉付近）の寄松山多聞寺の梵鐘として製作されたものである。その後の経緯は不明であるが、追銘によれば、延享二年（一七四六）に下高倉の畑の土中から発見され、小田中村の善福寺に寄進されたことが判明する。製作者の百濟氏は、旧久米南条郡長岡莊金屋で铸物業を始めたとされている。

あいぜんじしやうろうもんおよ にやうどう  
愛染寺鐘楼門及び仁王堂



愛染寺鐘楼門及び仁王堂は、境内の南西に位置し、旧出雲街道に面して建てられている。建立時期は、棟札の写しに記される正保元年（一六四四）と推定される。建築の形式は一間一戸の楼門で、屋根は正・背面に唐破風が付く入母屋造の檜皮葺である。門の左右には唐破風造の仁王堂が付属している。両側に仁王堂が取り付くこのような構成は、両山寺鐘楼門（美咲町）があるものの、美作地方でも稀少であり、建立年代が江戸時代前半に遡れる点でも貴重な建物である。さらに、主要な部材に桜を用いていることも建築的な特徴の一つとなっている。

やはすじやうあと たかやまじやうあと つけたり くさかりかげつぐぼしよ  
矢筈城跡（高山城跡） 附 草苺景継墓所



矢筈城跡は、鳥取県境に近い津山市加茂町山下・知和にそびえる標高756mの矢筈山に戦国時代に築かれた山城跡である。郭（曲輪）の西端から東端約1,600m、同北端から南端約500m、山頂と山麓の比高差約500mを有する。本城は、山陰の尼子方として当地に入部した草苺衡継によって天文元年～二年（1532～33）にかけて築城された。その後、草苺氏は、尼子氏の衰退に伴い毛利方についたため、宇喜多勢や羽柴秀吉によるたびたびの攻撃を受けながらも、難攻不落の城として一度も落城することがなかった。城主は、草苺景継・重継と受け継がれ、天正12年（1584）毛利輝元らの要請のより重継が退城するまで、約50年間使用された。また、山麓には、二代目城主景継の墓と伝えられる石塔、城主一族にまつわる伝承を持つ若宮神社などがある。